



里山バンキングの実証実験のため、金親博栄さん（左）が所有する里山を調べる小島雅史さん＝千葉市若葉区

■保全活動を証券化→開発企業が購入

荒れた里山を手入れして生態系の保全に貢献した効果売り出して、開発で自然を壊した企業に買ってもらう。そんな仕組みづくりを目指す実証実験が、千葉県内で始まっている。欧米に広がる「生物多様性オフセット」と呼ばれる手法の日本版だ。

千葉市郊外のなだらかな斜面に並ぶ田んぼ。裏手に広がる里山を今春、東京都市大の大学院生小島雅史さん（23）が訪れた。

背丈以上に伸びたササが所狭しと生えている。土地を所有する金親博栄（かねおやひろし）さん（65）が「山に入るのもためらってしまう」と言うのを聞き、「ササを刈るところからですね」と提案した。

金親さんが所有する里山は自宅周辺の約18ヘクタール。1960年ごろまでは、薪や木材の生産の場として収入源になっていた。里山に人の手が入ることで、たくさんの生物が暮らす生態系が維持されてきた。

だが薪の需要は減り、安い輸入材に押されて木材もほとんど売れなくなった。それでも、倒木が道をふさぐと撤去しないといけないし、ごみの不法投棄もある。維持費は所有者が負担しなければならない。

金親さんは「里山が二酸化炭素を吸収したり、たくさんの生物のすみかとなったりするという認識は広まっているが、持っただけでお金にならない。地主が管理したくなるような社会システムが必要だ」と訴える。

実は、そういうシステムはある。

開発をして生物多様性が失われることが避けられない場合、開発業者が別のところで生態系を復元するなど多様性を取り戻す活動をすれば、多様性の喪失はトータルで相殺（オフセット）される。「生物多様性オフセット」という考え方だ。

だが開発業者が生態系を復元するのに適した土地を見つけられるとは限らない。そこで、金親さんのような地主が持つ里山の整備活動に値段をつけ、証券として売り出す。地主にとっては証券の売り上げで里山整備の意欲が刺激されることになり、開発業者は証券を買うことで間接的に多様性の保全に貢献できるという仕組みだ。

欧米では制度化の例もある。放置されている里山に目を付け、「生物多様性の保全」という環境価値をお金のような形で売買する「里山バンキング」と名付けて、東京都市大の田中章教授が始めた。

今後2年間で、里山の植生や手入れの状況▽生態系を維持管理していくために必要な費用▽この仕組みに対する開発企業側の意識——などを調査。証券を購入してくれる企業も探していく。

田中教授は「生物多様性を守るため、里山の整備にどのくらいの費用が必要か。実証実験で算出することで、仕組みに興味を持つ企業や団体が増えることを期待している」と話している。

■市場規模、世界で1800億～2900億円

米国に拠点を置く国際NPO「フォレスト・トレズ」が2010年にまとめた報告書によると、生物多様性オフセットは、世界的に少なくとも18億～29億ドル（1800億～2900億円）の市場規模になっている。

米国では1980年代から、生物多様性を保全した効果を証券としてためておき、自然を壊す開発業者がその証券を購入するバンキング制度が始まった。湿地を保全するものや、絶滅危惧種が生息する生態系を守るものなどがある。この仕組みで、年間約100平方キロの土地が保全されたり、復元されたりしているという。

日本では制度化されていないが、環境省の中央環境審議会は10年2月、生物多様性オフセットについて「生物多様性の損失を最小限にする手段の一つとして有効な一面もある。まずは、国内外の事例の蓄積が必要で、具体的に議論すべきである」と答申。環境省は海外での事例や日本での導入の是非を調べている。

愛知県は今年4月、独自に生物多様性の保全を支援しようとする取り組みを始めた。

開発の前後で、どれだけ生物多様性が失われるかを定量的に評価する方法を公開。イトトンボ類など17種類の生物について、県内で生息に適した場所を地図上に示し、生態系を保全する場合の場所選びの参考にしてもらう。

開発業者にオフセットの義務を課してはいないが、県の担当者は「大企業を中心に生物多様性に配慮しようとする意識は高まっている。保全するための仕組みを提供し、協力を求めたい」と話す。

(合田禄)



〈生物多様性オフセット〉

開発で自然を壊してしまう場合、生態系を別の場所に新たに造ったり復元したりすることにより、損害を相殺（オフセット）すること。米国やドイツ、オーストラリアなどで盛んで、50カ国以上が制度を導入している。効率的に進めるため、まとまった土地で自然の創造や復元を実施し、その効果を売買するバンキング制度も広がっている。



■記者ノート 生物多様性オフセット まず仕組み作りを

金親さんの里山では、コナラやクヌギの木が太陽の光を求めて枝をあちこちに伸ばし、下の地面にもたくさんの草が生えていた。そこで暮らす昆虫や微生物、地下を流れる水、根に支えられた土壌など、生態系はあまりに複雑に出来ていて、その全てを把握することはできない。

生態系の価値を評価することはとても難しい。開発で失われてしまった生態系の代わりに全く同じものを復元することは不可能で、オフセットはこの問題を全て解決する万能な制度ではない。

ただ、環境省の専門家委員会の報告（2010年）によると、「国内の生物多様性の損失は森林や海などすべての生態系に及び、全体的に見れば損失は今も続いている」という。何もしないと、生物多様性は失われ続けるばかりだ。

大手企業には自主的に森林を購入して整備するなどの動きも出ている。生態系をきちんと評価する方法が確立していないという指摘もあるが、一定の妥協をしてでも、先に仕組みを作った方が得策ではないか。